

# クラウゼヴィッツ・ルネサンス再考

—ヒューマンイズムのなかのクラウゼヴィッツ—

中 島 浩 貴\*

## Nachdenken über Clausewitz Renaissance

—Clausewitz in Humanismus—

NAKAJIMA Hiroki\*

### Abstract

„Clausewitz Renaissance“ zeigt die internationale Situation, die vieler Wissenschaftler nach der zweiten Weltkrieg für Clausewitz oder „Vom Kriege“ interessieren hat. Die Clausewitz-Forschung neigte bisher dazu, dass die bestimmte These als Schwerpunktthema erörtern werden, doch „Clausewitz Renaissance“ beabsichtigte im Wesentlichen die umfassende Bewertung für Clausewitz-Gedanke. Der Beitrag behandelt, in der Zeit des kalten Krieg der Bereich der Geistes- und Sozialwissenschaft mit Clausewitz-Forschung zusammenzuwirken hat.

**キーワード** : クラウゼヴィッツ、クラウゼヴィッツ・ルネサンス、ヴェルナー・ハールヴェーク、レイモン・アロン、ピーター・パレット

**Keywords** : Clausewitz, Clausewitz-Renaissance, Werner Hahlweg, Raymond Aron, Peter Paret

### 1. はじめに

クラウゼヴィッツ、あるいは『戦争論』に関する研究のなかで、1960年代から80年代にかけての再評価の動きである「クラウゼヴィッツ・ルネサンス」は現在でも欠かすことのできない位置を占めている。この用語自体、クラウゼヴィッツへの関心が高まった状況をよく表している。これはドイツだけにとどまらない国際的な動きであり、アメリカ、イギリス、フランスなどでも同時並行的に進んだ。「クラウゼヴィッツ・ルネサンス」の文脈でとらえられる研究者としてまず挙げられるのは、マイケル・ハワード、ピーター・パレット、バーナード・ブローディである。彼らのクラウゼヴィッツ解釈はクラウゼヴィッツの再評価を英語圏全体にもたらすことになった。フランスでも、社会学者のレイモン・アロンがクラウゼヴィッツに関する再解釈を提示し、国際的に高い評価を受けることになった。このような

動きに先行して、ドイツでもヴェルナー・ハールヴェークが自分自身で研究を行うだけでなく、クラウゼヴィッツの『戦争論』に至る未公開の著作を整理、出版し、研究の進展に大きく寄与した。

「クラウゼヴィッツ・ルネサンス」の影響力は現在でも継続している。とりわけ代表的なパレット、ハワード、そしてアロンの解釈は、クラウゼヴィッツの「戦争とは他の手段をもってする政治の継続である<sup>1)</sup>」という文言を重視する「リベラルな解釈」としてクラウゼヴィッツ理解はもちろんのこと、政治学的観点から見た場合のクラウゼヴィッツ解釈のなかにおいても大きな位置を占めることになった。「リベラルな解釈」は、現在においてももっとも影響力のある解釈といっても過言ではなからう。

ところで、「リベラルな解釈」という表現は当然のことながら批判的な意味合いをも含んでいる。「リベラルな解釈」がクラウゼヴィッツ理解において重要視されてきた「殲滅戦」の論理や敵の打倒と

\*理工学部共通教育群助教 Assistant Professor, Division of Liberal Arts, Natural, Social and Health Science, School of Science and Engineering

いった概念を軽視しているといった批判である<sup>2</sup>。この批判のなかでは、軍人としてのクラウゼヴィッツの視点を重視する傾向があり、摩擦や打倒といった現実の戦場での使える論拠が用いられる。

本稿では、このような状況を踏まえつつ「クラウゼヴィッツ・ルネサンス」の再検討を行いたい。旧来の時間軸の区分には問題があるし、またこの動きをあらためて包括的に認識することが求められる。「クラウゼヴィッツ・ルネサンス」を再検討し、全体像として何が論じられていたのかを改めて明らかにしていきたい。

## 1. 「クラウゼヴィッツ・ルネサンス」研究の中心軸

### 1. ドイツ語圏におけるクラウゼヴィッツ再解釈——ヴェルナー・ハールヴェークのクラウゼヴィッツ研究

第二次世界大戦後のドイツ連邦共和国では、ナチズムによる戦争と敗戦によって大学での研究テーマとして戦争を扱うことがタブー視された<sup>3</sup>。このためクラウゼヴィッツや『戦争論』に対する注目や研究も限定されることになった。

この唯一の例外がミュンスター大学のヴェルナー・ハールヴェークである。ハールヴェークは元来近世史の研究者であったが、その研究範囲を広げ現代のパルチザンや小戦争（kleiner Krieg）にも関心を持ち、ナポレオン戦争期のプロイセンの歴史研究と同時代の戦争に取り組んだ<sup>4</sup>。冷戦期において、ハールヴェークの講座は事実上ドイツの大学で唯一のクラウゼヴィッツ研究拠点として機能し、ウルリヒ・マールヴェーデルといった研究者をも輩出している<sup>5</sup>。ハールヴェークの研究は、ゲリラ戦を中心とした現代の戦争との関連性、クラウゼヴィッツの伝記、残した史資料の整理、出版にまで及ぶ<sup>6</sup>。とりわけ、ハールヴェークが1952年に行った『戦争論』初版の復元と出版の影響は大きかった<sup>7</sup>。ここで明らかとなったように、旧来出版されていた『戦争論』が、編集のなかで著者の意図とは異なった形に編集されていたという事実は、クラウゼヴィッツ・ルネサンスを支えていく嚆矢となった。

ハールヴェーク自身のクラウゼヴィッツへの関心は、ナポレオン戦争期の歴史理解と冷戦期の問題

に結び付けられている。ハールヴェーク自身は、クラウゼヴィッツの伝記や史資料の編纂によってクラウゼヴィッツの思考形成過程を明らかにする一方で、同時代の問題、その中でも特にゲリラ戦との関連性のなかで強い関心をもったようである。1969年に出版されたハールヴェークの『クラウゼヴィッツ——軍人、政治家、思想家』は、クラウゼヴィッツに関する体系的な記述である<sup>8</sup>。

ハールヴェークのクラウゼヴィッツ解釈では、1810年から11年に士官学校で行われた小戦争に関する講義が大きな意味合いを持っている。『戦争論』につながる思想形成のなかで、クラウゼヴィッツ自身による同時代の戦争認識は重要な意味を持った。ナポレオン戦争を通じて戦争形態の変遷を考察するなかで、この小戦争講義は『戦争論』の「第六部防衛 第二十六章民衆の武装」を形成するうえで大きな役割を果たしたと指摘する<sup>9</sup>。クラウゼヴィッツの思想形成のプロセスへの着目は、1920年代のハンス・ロートフェルスの研究<sup>10</sup>以来のものであり、ハールヴェークはその著作のなかでクラウゼヴィッツ個人の伝記的記述と、その記述の思考形成のプロセス、そして後世への影響に焦点を絞った分析を行っている。ハールヴェークの記述スタイルはそののちの多くのクラウゼヴィッツ研究の基本的形式を与えたものといってよく、歴史的人物としてのクラウゼヴィッツ認識および評価、『戦争論』の形成プロセスとクラウゼヴィッツ自身の記述意図、そして戦争という事象の分析への『戦争論』の貢献がその後も多くの著作のなかで行われた<sup>11</sup>。

ハールヴェークのゲリラ戦への着目は、彼に限定されたものではなく、カール・シュミットとの共通性がある。両者ともパルチザンないしゲリラ戦という同時代的な問題分析のなかで、クラウゼヴィッツに着目している<sup>12</sup>。シュミットは同時代的分析の問題としては、敵概念の形成過程としてクラウゼヴィッツのナポレオン戦争期のパルチザン認識を用いたのであり、歴史的な変化状況を明らかにしようとした。ハールヴェークも当初ゲリラ戦の形態を解釈するうえで着目したが、その後にはクラウゼヴィッツの著作活動全体への研究に幅を広げていった。クラウゼヴィッツへの着目は、歴史的な理解とともに現代の戦争を理解するうえで注目がなされること

が多いが、比較分析の尺度としてクラウゼヴィッツを用いるやり方はすでに1960年代にも一般的なものであったといってもよい。クラウゼヴィッツ研究が、歴史的事実認識の確認と戦争概念理解の同時代的解釈という形式は、すでにハールヴェークのなかに見出される。それは戦争という事象を事実上唯一客観的に分析しようとした古典として普遍的な評価を与えようとする試みであった。

## 2. レイモン・アロンとクラウゼヴィッツ

レイモン・アロンはフランスの社会学者として名声を博した人物であり、クラウゼヴィッツ研究にも大きな足跡を残した人物として知られている。アロンはその回想録のなかで詳しく書いているが、第一次世界大戦から第二次世界大戦という戦争の時代を目の当たりにし、同時代の人々の人生を左右することになった戦争に対して強い関心を抱くようになった<sup>13</sup>。早くもアロンは1930年代のドイツ滞在中にクラウゼヴィッツ研究でも知られるヘルベルト・ロジンスキー<sup>14</sup>との接点があり、その後第二次世界大戦中には、ポーランド人のスタニスラス・シマンチク（スタロ）を通じて『戦争論』に触れることになった<sup>15</sup>。アロンは彼と『自由フランス』で軍事評論の執筆を行っていたためであり、アロンが第二次世界大戦後社会学者として名声を博していく一方で、戦争、平和、そしてクラウゼヴィッツに対する関心もまた強く持っていた。

アロンのクラウゼヴィッツに関する著作は、その経歴の終焉に書かれたものであった。彼は1971-72年のコレージュ・ド・フランスでの講義（アグレガシオン）でクラウゼヴィッツについて扱い、その内容をもとに1976年に大著『戦争を考える』を世に送り出した<sup>16</sup>。社会学者、そして政治学者としても著名であったアロンがクラウゼヴィッツに取り組んだことは、クラウゼヴィッツ研究に大きな影響を与えた。アロンの解釈は旧来の解釈の大幅な転換を図ることになる。現在でもアロンのクラウゼヴィッツ解釈は一定の影響を持ち、必ず参照される。アロンのクラウゼヴィッツ解釈を端的に表現するとすれば、クラウゼヴィッツの思想と『戦争論』全体の理解提案を行った。とくに、アロンの独創性として優れているといえるのが、旧来のクラウゼヴィ

ッツ理解からの脱却であった。アロンは、クラウゼヴィッツの解釈者として伝統的に著名であったホルマール・フォン・デア・ゴルトツやアルフレート・フォン・シュリーフェン、フェルディナン・フォッシュ、バジル・ヘンリー・リデルハートといった人々がクラウゼヴィッツのなかに見出した中心的論理である「殲滅戦」の論理に疑問を呈した<sup>17</sup>。確かに「殲滅戦」概念は、総力戦に向かっていく時代のなかで大きく着目されたものであったが、その一方でこの概念がクラウゼヴィッツの思想形態のなかで最も重視されることに對し批判的な見解をとることになった<sup>18</sup>。アロンはこれに代わって『戦争論』のテキストに注目し、そのなかで展開されているクラウゼヴィッツの真の意図を明らかにしようとした。アロンからすれば、クラウゼヴィッツは殲滅戦の創始者ではなく、後世の解釈者たちのなかでそのように認識されたに過ぎないものであった。政治によって制御される戦争という理解を前提として、アロン自身が生きた同時代の冷戦に至る戦争状況を分析する尺度として解釈している<sup>19</sup>。とりわけ核兵器による恐怖の均衡によって支えられていた当時の状況を考察するうえで、政治による戦争のコントロールに関する理解を促した点は重要である。アロンのテキスト解釈のなかで、クラウゼヴィッツがそれぞれの時代でどのように読まれたのか、それが現実の戦争とどのような関連性をもっているのかという観点は中心的な意味を持っている。アロンのそもそもの関心は現代の戦争であり、それがどのように分析されるのかという点にあった。彼はクラウゼヴィッツのテキストに着目することで現代の戦争についても分析する土台を手に入れたといえよう。アロンの主張は冷戦期において戦争をどのように理解し、解釈するのかという意識においてアメリカ、イギリス、ドイツなどの解釈に大きな影響を与えた。このためアロンの著書がフランス語の原文以上に英語、ドイツ語で読まれ、影響を与えたことは重要である<sup>20</sup>。とりわけ国際関係論の視点から高い評価を受けている点は、限定された軍事思想家としてのクラウゼヴィッツにとどまらず、すでに進行していた歴史学的検討に加えて、思想的、そして政治学的な理解にクラウゼヴィッツ研究の幅を広げるきっかけとなった。アロンの取り組みはクラウゼヴ

イツの思想家としての再評価をもたらしたとい  
ってよく、クラウゼヴィッツ研究の人文社会的な  
アプローチとしての多角化をもたらすうえで重要  
な役割を占めている。

### 3・ピーター・パレット、マイケル・ハワードによ るクラウゼヴィッツ論

ピーター・パレット、マイケル・ハワードによる  
1976年の『戦争論』の新訳は、クラウゼヴィッツ  
の著書が広範に受け入れられる素地を提供したと  
いう点で画期的な意味をもっている<sup>21</sup>。平易な翻訳  
によって、旧来英語圏では十分に理解されてこなか  
った状況は一変した。パレット、ハワードの研究は、  
ドイツ、フランスの新たな解釈をも包含する形でク  
ラウゼヴィッツ研究を活性化させるきっかけとな  
ったといえる。近年この英訳については、その解釈  
に対し異議を唱える見解も出てきているが<sup>22</sup>、旧来  
の翻訳と比較して英語として明快な意味が理解で  
きるような翻訳とみなされている。これはのちにド  
イツでもマールヴェーデルにより編集されたレク  
ラム版において、英語版に合わせた編集・要約が行  
われている点にもわかるように、英語圏以外の『戦  
争論』理解においても大きな影響を与えた<sup>23</sup>。

パレットの解釈では、クラウゼヴィッツの最も著  
名な標語「戦争とは他の手段をもってする政治の継  
続にほかならない」という文言が重視され、戦争の  
政治的コントロールに着目がなされている<sup>24</sup>。『戦  
争論』でも完成しているとみなされ、戦争概念につ  
いて明確な定義が与えられた「第一部 戦争の性格  
について 第一章 戦争とはなんであるか？」の重  
要性が意識され、また政治についての言及が行われ  
ている第八部が改めて着目される結果をもたらした。  
こうした状況は、ハールヴェークやアロンと同じく  
同時代の戦争、つまり冷戦やヴェトナム戦争が結  
局のところ政治ないし政策によって規定されざる  
を得なかった経験とも結びついていた。加えて、  
単純な技術中心主義的、テクノクラートの戦争観に  
対する批判として引用されるようになる土台を提  
供したことも大きい<sup>25</sup>。「摩擦」概念の重視はその  
一例である。「摩擦」はクラウゼヴィッツ解釈のな  
かで重要視される用語のひとつであり、その著作の  
なかで必ずしも中心問題として扱われている問題

ではないが、この用語はクラウゼヴィッツによる戦  
争の本質的な状況を示す用語として扱われてきて  
いる<sup>26</sup>。テクノクラート色の強いアメリカの国防長  
官マクナマラが実践することになったヴェトナム  
戦争批判の文脈にはうってつけの概念であった。ほ  
かにもクラウゼヴィッツに範をとる概念の現代の  
利用は、「戦争の三位一体」「エスカレーション」な  
どにもみられる。用語、現代の概念認識のなかでの  
クラウゼヴィッツ解釈は、すでにドイツでも帝政期  
以降第二次世界大戦に至るまで一般的なクラウゼ  
ヴィッツ解釈のなかにもみられたものであり、英語  
圏におけるクラウゼヴィッツ理解の拡大とともに  
継承された。

パレットの研究自体は、このような特定のターム  
にのみ拘泥するのではなく、またクラウゼヴィッツ  
個人の伝記的研究と『戦争論』を結び付けている点  
で、ハールヴェークやアロンといった同時代の研究  
と軌を一にしている。パレットによる研究として、  
1985年に出版された『クラウゼヴィッツ——「戦争  
論」の誕生』は特筆される<sup>27</sup>。クラウゼヴィッツが  
その時代においてどのように生きたのか、その時代  
状況を正確に把握するべく意図された本書は、『戦  
争論』に結実する思想がどのようなプロセスで持つ  
て形成されたのかを丹念に検討している。パレット  
の著作には、クラウゼヴィッツの現代の戦争分析に  
いかに応用するのかといった問題関心よりも、歴史  
的な事実認識におけるクラウゼヴィッツそのもの  
の思想形成が重視されている<sup>28</sup>。もちろん、アロン  
と共通するように『戦争論』そのものの記述の「コ  
ンテキスト」（スミダ）の重要性に注意が払われて  
いる点に特色がある<sup>29</sup>。歴史性、同時代性、記述の  
形成プロセスに関する分析についてのパレットの  
貢献は極めて大きい。

## II. 「クラウゼヴィッツ・ルネサンス」批判と 「ヒューマニズム」

「クラウゼヴィッツ・ルネサンス」に対しては批  
判もなされている。ロベルト・ヘップ「無害なクラ  
ウゼヴィッツ——クラウゼヴィッツ・ルネサンスに  
関する独英仏の批判的検討」は特徴的である<sup>30</sup>。ヘ  
ップは1970年代に盛んとなったクラウゼヴィッツ



の再評価を全面的に批判しているが、彼の批判には現在のクラウゼヴィッツ研究のなかにも形を変えて見出しうる性質の問題がある。「クラウゼヴィッツ・ルネサンス」が旧来の研究とどのように断絶していたのかという点で彼の指摘は逆説的に有益であり、クラウゼヴィッツそして『戦争論』のなかに何を求め、何を見出すのかという観点において陥りやすい問題点を見出すことができる。

ヘップのクラウゼヴィッツ・ルネサンスに対する批判は広範囲に及んでいる。ヴェルナー・ハールヴェーク、ヴィルヘルム・フォン・シュラム<sup>31</sup>、ピーター・パレット、レイモン・アロンに至るクラウゼヴィッツ理解を全面的に攻撃している。ヘップはその中でもとくにシュラム、パレット、アロンに注目し批判している。クラウゼヴィッツを「コスモポリタン」として描き出し、プロイセン特有の国民性、歴史性から距離を置いて描き出した点を批判している<sup>32</sup>。プロイセン軍人としてのクラウゼヴィッツの独自性を強調し、コスモポリタンとしてクラウゼヴィッツを描くことに明確な嫌悪感を示している。クラウゼヴィッツの一般化を拒絶しているとも理解できる。ヘップの論文のタイトル「無害なクラウゼヴィッツ」もプロイセンの固有性、ナショナルな要因に距離を置いている点を中心に批判を行っている。

アロンは『回想録』のなかでヘップの批判に言及しているが、その指摘を「瑣末主義」ととらえている<sup>33</sup>。そこに明確なドイツ・ナショナリズム的な傾向がみられるものととらえている<sup>34</sup>。加えてヘップはプロイセン・ドイツの固有性、軍事的解釈を重視していた。これは「クラウゼヴィッツ・ルネサンス」が向かっていった方向性とは明白に対立していた。「クラウゼヴィッツ・ルネサンス」は、ナショナリズムとインターナショナリズムに偏ることなく、純軍事的に限定された解釈から一般的、普遍的な戦争解釈を重視することに主眼が置かれており、軍事的論拠に限定されない視野の広い人間としてクラウゼヴィッツ理解を行っていた。この意味でクラウゼヴィッツを特定の価値観から解放する点で「無害化」という表現は、ヘップの意図とは全く別の意味で、的を射ているともいえよう。戦争現象を人間が中心にかかわる問題として認識し、包括的にこの戦

争という問題を分析、検討したクラウゼヴィッツという人物、その思想形成、著作、そして後世への影響や現実の現象としての戦争との比較検討という観点で扱うことが「クラウゼヴィッツ・ルネサンス」の本質であった。その意味では、特定の用語にのみこだわることを重視せず、総合的な人格として、思想家としてクラウゼヴィッツをとらえた「ルネサンス」はまさにヒューマニズムの観点のなかでクラウゼヴィッツを再解釈したものとしてとらえられる。そしてそれは人文社会科学の総合的な発展がクラウゼヴィッツ解釈にもたらした成果のひとつであった。

同時期に戦争について扱い、クラウゼヴィッツにも言及しているミシェル・フーコーの講義が、『戦争論』の枠組みに拘泥せず、近代以前には逆にクラウゼヴィッツ的な戦争に対する政治の優位とは異なる認識があった状況を重視したことは興味深い<sup>35</sup>。「クラウゼヴィッツ・ルネサンス」の論者とフーコーの視点が大きく異なるのは、「戦争」を対象としていても、必然的に特定の思想家の分析方法にではなく、広範な時間軸のなかでクラウゼヴィッツ的戦争理解を相対化していく傾向が強いものであった。どちらも尺度として用いている点では同じであるが、比重は大きく異なっている。

「クラウゼヴィッツ・ルネサンス」の主張に関しては、冷戦、核戦争の状況への言及状況の下で導き出された傾向が主張されてきた<sup>36</sup>。確かにこうした問題関心がクラウゼヴィッツの再評価と密接に結びついていた状況は重要である。しかしながら、『戦争論』に結びつく議論の全面的な活性化を論じていくには不十分であろう。たしかにパルチザン、ゲリラ戦争への着目に見られるように、クラウゼヴィッツの分析を現代とどのように関連付けていくのかという問題意識は今でも継続している。すでに言及したように、同様の試みはカール・シュミットによっても行われていたし、多くの点で「クラウゼヴィッツ・ルネサンス」に至る動きと共通点がある。しかし、シュミットが「クラウゼヴィッツ・ルネサンス」の文脈で取り上げられることはほとんどみられない。ヴェルナー・ハールヴェークのクラウゼヴィッツ研究の特徴であり、さらにそれ以降のすべてのクラウゼヴィッツ研究のなかで前提となっている

のは、クラウゼヴィッツの歴史的立ち位置とその思想形成のプロセスであった。ハールヴェークも当初は現代の戦争を構築する論理に中心的な問題関心があったがその一方で、それとは異なるクラウゼヴィッツの生きた過去の歴史的な時代軸に特に着目していた。このことは、「敵」概念の検討のためにクラウゼヴィッツのパルチザン戦への言及に着目をしたシュミットと大きな隔たりがある。

クラウゼヴィッツの全体性への着目という意味では、アロンもパレットもハワードも共通している。むしろそれぞれの研究者は評価軸が異なっており、クラウゼヴィッツの主張のなかで何が重要なのかという点では微妙な違いがあった。現在のクラウゼヴィッツ研究ではこの評価軸の相違を対象とした研究も登場している<sup>37</sup>。戦争に対する政治の優位への注目もまた、旧来の軍中心の解釈の転換をもたらし、戦前の軍事的論拠を根本的に転換させ、同様に「殲滅戦」概念を至上のものととらえる第一次世界大戦以降継続してドイツの軍事ドクトリンに重大な影響を与えたとされた、クラウゼヴィッツは罪から解放されたのである。断片、部分としてその著作を解釈することよりも、全体の著作のなかで本質的に重要な点は何かという点が強調されたのが、「クラウゼヴィッツ・ルネサンス」の大きな成果であった。

つまりこのような解釈は「リベラルな解釈」という純軍事的な解釈に限定されない人間としてのクラウゼヴィッツに関する再評価と結びついている。このバックボーンには人文社会科学的解釈が存在していた。軍、ナショナリスト、「ドイツ軍国主義的解釈」の独占的な解釈から解放することによって、歴史的な文脈のなかでナポレオン戦争期の軍人としてクラウゼヴィッツがどのように思想形成がなされたのかが、歴史的な解釈のなかで重要になった。

しかしその一方で、こうした解釈は第二次世界大戦以降ヴェトナム戦争に至るまで声高に叫ばれることになったテクノクラートの問題、近代科学技術や合理性に伴う隘路とも密接に結びついていた。批判者にとり「無害」化されたという批判を導き出すことになるクラウゼヴィッツ評価の重要性は、人文主義的なクラウゼヴィッツ解釈のなかで形成されたといってもよいであろう。それは人間を中心とし

ているという意味で「ヒューマニズム」であった。もちろん戦争は第二次世界大戦以降の同時代の多くのヒューマニストには好まれないテーマではあった。こうした中で客観的に戦争を分析しようとしたクラウゼヴィッツへの関心の高まりは、第二次世界大戦後のヒューマニズムの復活が幅広い領域で拡大していたことの表れであるといってもよいかもしれない。とりわけ、軍事面だけでない社会全体の技術中心主義、科学批判が人文社会科学領域では主流であった状況のなかで扱いの難しかった対象である戦争を論じることができたのである。

もちろん、平和学のなかで言及されたような、戦争自体の倫理性に対する問いは「クラウゼヴィッツ・ルネサンス」では行われず、その適応範囲は限定されたものとどまった。あくまでこの動きは、現実に存在する戦争解釈、分析の土台としての評価をもたらすものであった。アロンが、絶対戦争理解と戦争のエスカレーションに関する問題関心を強く持ったこと、そして人間の介在によるコントロールの重要性を強調するなかで、クラウゼヴィッツに着目したのは、まさにこの一例であるといえよう。

また「クラウゼヴィッツ・ルネサンス」は、ナショナリスティックな解釈から距離を取った。このナショナリズムとリベラリズムという対立軸では測りきれない問題として「ヒューマニズム」の重視があり、そしてテクノクラティズムとの対立が登場してくることも興味深い。少なくとも第二次世界大戦ないし冷戦の左右の対立軸の延長線ではない評価が求められよう。

「クラウゼヴィッツ・ルネサンス」は、クラウゼヴィッツの解釈をめぐってそれが独立した研究テーマとなること、そしてその研究手法が歴史学ないし思想史の形態をとることになった点でも意義があった。このなかで、ハールヴェーク、アロン、パレットらが果たした役割は極めて大きかった。彼らに共通するのは、思想史、哲学的アプローチと先行研究の重要であり、現在でも継続して影響を及ぼしている。そして、人間の歴史と密接な関連のある「戦争」現象の分析のなかでクラウゼヴィッツは普遍的な意味を持ったのである。戦争を人間社会とは離れて自律的に進行するものと考えたり、現実の戦争が敵を完全に殲滅したり、絶滅させる必要がある

という思考形態や、兵器の破壊力が無制限にエスカレートするなかであたかも戦争そのものや兵器が戦争を支配する中核的要因であるという言及に対し、警鐘を鳴らすことができたのである。戦争とは、あくまで人間によってコントロールされることが前提であり、テクノクラート、テクノロジー中心主義的解釈へのアンチテーゼとしての解釈の根源として扱う土台を提供することになったのである。

## おわりに

「クラウゼヴィッツ・ルネサンス」は主体的要因としての人間への回帰の一例であった。戦争は人文社会科学にとって扱いの難しい問題であり、この問題を人間的に理解する際にナポレオン戦争期にその本質を模索したクラウゼヴィッツが果たした役割は決して小さなものではない。戦争事象が「ヒューマスティック」に解釈されることに必要性の強調こそが、現代の虚無的な技術中心主義、物質主義、テクノロジー万能論への警告になり、別の選択肢を提示するための根底をも提供することが可能であった。現在でも「クラウゼヴィッツ・ルネサンス」の影響は、クラウゼヴィッツ研究者の多くに残っている。しかしその一方で「クラウゼヴィッツ・ルネサンス」批判の文脈のなかで全体的な理解やクラウゼヴィッツの同時代性よりも、個別のテーマに関する研究が増大しているのが現在の状況である。とくに、『戦争論』で提示されている個別の命題に力点を置く、「リベラルな解釈」のなかで提示されているクラウゼヴィッツ認識を批判する研究については、個別研究、細分化研究のメリットがあるなかでそのデメリットにも注意する必要があるだろう。

## 注

- <sup>1</sup> Carl von Clausewitz, Vom Kriege: Hiterlassenes Werk des Generals Carl von Clausewitz, 19. Auflage. Bonn 1980, S.210(クラウゼヴィッツ、清水多吉訳『戦争論』中央公論新社、2001年、63頁)。
- <sup>2</sup> Jan Willem Honig, Clausewitz's On War: Problems of Text and Translation, in Hew Strachan/Andreas Herberg-Rothe(ed.), Clausewitz in the Twenty-First Century, Oxford 2007, pp.57-73.
- <sup>3</sup> Thomas Kühne/Benjamin Ziemann, Militärgeschichte in der Erweiterung, in: Thomas Kühne/

Benjamin Ziemann(Hg.), Was ist Militärgeschichte?, Paderborn 2000, S.10-11.

<sup>4</sup> Werner Hahlweg, Lehrmeister des kleinen Kriegeres. Von Clausewitz bis Mao Tse-Tung und Guevara, Darmstadt, 1968. Hahlweg, Preußische Reformzeit und revolutionärer Krieg, Frankfurt a. M. 1962.

<sup>5</sup> Ulrich Marwedel, Carl von Clausewitz: Persönlichkeit und Wirkungsgeschichte seines Werkes bis 1918, Boppard am Rhein 1978.

<sup>6</sup> Hahlweg(Hg.), Carl von Clausewitz: Schriften-Aufsätze-Studien-Briefe, Göttingen 1966; Hahlweg, Carl von Clausewitz: Schriften-Aufsätze-Studien-Briefe, II Bd., I Teilband, Göttingen 1990; II Bd., II Teilband, Göttingen 1990.

<sup>7</sup> Carl von Clausewitz, Vom Kriege: Hiterlassenes Werk des Generals Carl von Clausewitz, 15. Auflage. Bonn 1952.

<sup>8</sup> Hahlweg, Clausewitz: Soldat-Politiker-Denker, Göttingen 1969.

<sup>9</sup> Hahlweg, Clausewitz, S.67-68; Hahlweg(Hg.), Carl von Clausewitz, S.208-611.特に Meine Vorlesungen über der kleinen Krieg, gehalten auf der Krieg-Schule 1810 und 1811-Artillerie, Geschütze 及び Précis de la guerre en Espagne et en Portugal はクラウゼヴィッツのゲリラ戦への関心を具体的に表している。

<sup>10</sup> Hans Rothfels, Carl von Clausewitz: Politik und Krieg. Eine ideengeschichtliche Studie, Bonn 1980(Reprint).邦訳としては、ハンス・ロートフェルス、新庄宗雅訳『クラウゼヴィッツ論 政治と戦争—思想史的研究』私家版、1983年。

<sup>11</sup> たとえば、クラウゼヴィッツと『戦争論』に関する研究の多くが同様の形式を踏襲している。Michael Howard, Clausewitz: A Very Short Introduction, Oxford 1983; Dietmar Schössler, Carl von Clausewitz, Hamburg 1991; Hew Strachan, Carl von Clausewitz's On War: A Biography, London 2007; Beatrice Heuser, Clausewitz lesen!: Eine Einführung, 2. Auflage, München 2010 ほか。

<sup>12</sup> カール・シュミット、新田邦夫訳『パルチザンの理論 政治的なものの概念についての中間所見』ちくま学芸文庫、1995年、93-117頁。シュミットのクラウゼヴィッツ解釈については、以下を参照。三宅正樹「ドイツにおけるクラウゼヴィッツ研究史を中心として」清水多吉・石津朋之編『クラウゼヴィッツと「戦争論」』彩流社、2007年、114-117頁。大竹弘二『正戦と内戦 カール・シュミットの国際秩序思想』以文社、2009年、321-346頁。

<sup>13</sup> アロンのクラウゼヴィッツに関する関心は回想



録のなかに見出せる。三保元訳『レーモン・アロン  
回想録 1 政治の誘惑』『2 知識人としての歳月』み  
すず書房、1999 年。特に 2、681-707 頁を参照。  
また、以下の文献も回想録をもとにアロンのクラウ  
ゼヴィッツ研究の意図を解釈している。Jon  
Tetsuro Sumida, *Decoding Clausewitz: A New  
Approach to On War*, Kansas 2008, pp.37-38;  
Murielle Cozette, *Reading Clausewitz: Raymond  
Aron's Interpretation of On War*, in Andreas  
Herberg-Rothe, Jan Willem Honig, Daniel  
Moran(ed.), *Clausewitz: The State and War*,  
Stuttgart 2011, pp.109-127.

<sup>14</sup> ヘルベルト・ロジンスキー「『序言』及び『手記』  
に照らして見たクラウゼヴィッツの著作『戦争論』  
の発展」オットー・ヒンツェ、ヘルベルト・ロジ  
ンスキー、エーベルハルト・ケッセル、新庄宗雅訳『ク  
ラウゼヴィッツ研究論文選』私家版、83-101 頁。  
<sup>15</sup> 『レーモン・アロン回想録 1』181 頁、184-185  
頁。

<sup>16</sup> Raymond Aron, *Penser la guerre, Clausewitz*,  
1. L'âge Européen, gallimard 1976; 2. L'âge  
planétaire, gallimard 1976.邦訳は仏語原本の二巻  
目のみ。レイモン・アロン、佐藤毅夫・中村五雄訳  
『戦争を考える クラウゼヴィッツと現代の戦略』  
政治広報センター、1978 年。

<sup>17</sup> アロン『戦争を考える』1-57 頁。

<sup>18</sup> アロン『戦争を考える』7-8 頁。

<sup>19</sup> アロン『戦争を考える』329-338 頁。Cozette,  
*Reading Clausewitz*, pp.115-123.

<sup>20</sup> ドイツ語、英語でも翻訳がなされており、参照  
されている。Aron, *Clausewitz. Den Krieg denken*,  
Frankfurt a. M. 1980; Aron, *Clausewitz.  
Philosopher of War*, London 1983.

<sup>21</sup> Carl von Clausewitz, Michael Howard and  
Peter Paret(ed. and trans.), *On War*, Princeton  
1976.

<sup>22</sup> たとえば、Honig, *Clausewitz's On War*, in:  
*Clausewitz in the Twenty-First Century*,  
pp.57-73 では、パレットとハワードの翻訳に敬意  
を払いつつも、翻訳に伴う解釈の問題性を批判して  
いる。

<sup>23</sup> Carl von Clausewitz, Ulrich Marwedel(Hg.),  
*Vom Kriege: Auswahl*, Stuttgart(Reclam) 1980.

<sup>24</sup> なお、クラウゼヴィッツ解釈をめぐる議論でも、  
パレットとハワードの主張は再検討される傾向に  
ある。Sumida, *Decoding Clausewitz*, pp.50-64.

<sup>25</sup> ウィリアムソン・マーレー、大井知範訳「コン

ピューター時代のクラウゼヴィッツ」『クラウゼヴ  
ィッツと「戦争論』』339-354 頁。

<sup>26</sup> 「摩擦」への言及はクラウゼヴィッツ解釈のな  
かで伝統的に行われているものであり、第二次世界  
大戦以前からある。また、ハールヴェークも言及し  
ている。Hahlweg, *Clausewitz*, S.92-93.

<sup>27</sup> ピーター・パレット、白須英子訳『クラウゼヴ  
ィッツ 「戦争論」の誕生』中公文庫、1991 年。

<sup>28</sup> コンパクトにまとめられた総合的評伝のなか  
にもその特徴ははっきりとみられる。Peter Paret  
(ed.), *Makers of Modern Strategy: From Machi-  
avelli to the Nuclear Age*, Princeton 1986, pp.  
186-213.ピーター・パレット編、防衛大学校「戦争・  
戦略の変遷」研究会訳『現代戦略思想の系譜 マキ  
ャヴェリから核時代まで』ダイヤモンド社、1989  
年、167-192 頁。

<sup>29</sup> Sumida, *Decoding Clausewitz*, pp.50.

<sup>30</sup> Robert Hepp, *Der harmlose Clausewitz (I):  
Kritische Bemerkungen zu einem deutschen,  
englischen und französischen Beitrag zur  
Clausewitz-Renaissance*, in: *Zeitschrift für  
Politik*, V.25, N.3(1978), S.303-318, Robert Hepp,  
*Der harmlose Clausewitz (II): Kritische  
Bemerkungen zu einem deutschen, englischen  
und französischen Beitrag zur Clausewitz-  
Renaissance*, in: *Zeitschrift für Politik*, V.25, N.4  
(1978), S.390-429.

<sup>31</sup> Wilhelm von Schramm, *Clausewitz: Genral  
und Philosoph*, München 1976.

<sup>32</sup> Hepp, *Der harmlose Clausewitz (I)*, S.312, 316,  
318.

<sup>33</sup> 『レーモン・アロン回想録 2』699 頁。

<sup>34</sup> 『レーモン・アロン回想録 2』707 頁。

<sup>35</sup> クラウゼヴィッツ以前に着目した講義として、  
ミシェル・フーコー、石田英敬・小野正嗣訳『社会  
は防衛しなければならない コレージュ・ド・フラ  
ンス講義 一九七五-七六年度』筑摩書房、2007  
年。松葉祥一「歴史・人種・権力 フーコーによる  
ブーランヴィリエの戦争論」『現代思想』Vol.31-16、  
青土社、2003 年、172-183 頁。重田園江「戦争と  
しての政治 一九七六年講義」同上、184-205 頁。

<sup>36</sup> ホーニヒ「クラウゼヴィッツと現代戦略思考の  
危機」『クラウゼヴィッツと戦争論』305-308, 318  
頁。

<sup>37</sup> Sumida, *Decoding Clausewitz* は全体的な再解  
釈の試みとして興味深い例である。